

日英ことわざ文化散歩

中井 弘一

「言語はその使用者の思考様式や精神構造に一定の影響を与える」というサピア-ウォーフの仮説があるが、言葉は文化であると思う。人が話す言葉と、人が物事を理解する方法や振る舞い方には密接な関係がある。したがって言葉が変われば文化も異なる。そうした言語文化の違いを英語の授業で生徒に考えさせたいと思っている英語科教員は少なからずいる。しかしながら、急激に進むグローバル化とそれに連動する市場主義経済情勢を背景に文部科学省は英語教育においては、小学校 5 年生からの英語を正規授業科目とする英語の早期教育化、高等学校では発表、討論、交渉等を行うなど到達目標の高度化をめざす施策を掲げ、「考える英語」より実社会で「使える英語」という英語運用能力の育成を声高に要請し、自国の言語文化との比較などを通して言葉を文化として学ばせることより、英語で言語活動を行うことが優先されている。

そうした中でも、日英の言語文化の違いに目を向け、言語文化の面白さを生徒に伝えようとしている英語科教員がいる。その一例には、「日英ことわざ比較」がある。帯学習で毎時間一つ二つ先生が紹介することから日英ことわざの由来を生徒が発表する活動まで幅広く学習活動が行われている。

ことわざとは「昔から人々の間で言いならわされた、風刺・教訓・知識・興趣などをもった簡潔な言葉」であり、また proverb は “a short, well-known pithy saying, stating a general truth or piece of advice” で、どちらにしても、生活から生まれた「人生の知恵」であることに変わりない。日英のことわざには類似しているものもあれば、相違しているものもある。すなわち、ことわざの背景となっている考え方や行動形態を知ること、それぞれの国の言語文化に触れることができる。ことわざという簡潔な一文に、一国の文化や叡智が込められているのである。

さて今日は、日頃の忙しい職務を忘れ、しばし日英ことわざの文化散歩に出かけてみよう。

1. 人の噂も 75 日

A wonder lasts but nine days in a town.

世間の噂も長く続かずやがて忘れられる。75 日という日数に根拠があるとは思えないが、語呂合わせと説明している書籍もある。日本語では、「噂：人の身の上や、事件について陰で話をする事」について言及しているが、英語では “wonder: a feeling of

amazement and admiration, caused by something beautiful, remarkable, or unfamiliar” 「不思議」について述べている。周りを意識する日本人の感覚との違いであろうか。また、英語では9日と日本語のことわざに比べると短い日数である。一時人々の注意を惹くだけですぐに忘れられるということなのだろう。

2. 猫に鯉節

To a cat that licks the spit, trust not roast-meat.

To set the wolf to keep the sheep.

動物を扱ったことわざは日英双方にある。「猫」が出てくる日本語のことわざには、「猫の手も借りたい」「鳴く猫はネズミを捕らず」などがある。今はキャットフードが充実しているが、昔は猫の好物といえば煮魚の汁や魚などと思われていた。そんな好物を置いておいたら、食べてくれと言っているようなもの、危なっかしくてしょうが無いというたとえである。英語のことわざも猫を使ったたとえであるが、好物はロースト・ミート焼き肉で、その番をさせるなど述べている。類句のことわざに「羊の番を狼にさせる」が出てくるなど、根底に牧畜文化があることが推し量られる。「鯉節」でなく「小判」とすれば、「猫に小判」で「値打ちを知らないものには何の意味も無い」安心していられるのだが、英語では“Don't cast pearls before swine.”(豚の前に真珠をなげるなー豚に真珠)である。このことわざは「豚はそれらを踏みつけ、あなたがたに向かってかみついてくるだろう」と新約聖書「マタイ伝」から生まれたものである。牧畜文化の英語の特徴として、豚と言えば、a pig, a hog; 【去勢しない雄豚】 a boar; 【雌豚】 a sow; 《古》 a swine などと言葉が豊富である。

3. 来年のことを言うと鬼が笑う

Nobody [God] knows what may happen next year.

Don't count your chickens before they're hatched.

今年もあと一月で年が変わる。来年のことを口にしたくなるものだが、このことわざは、「明日のことさえわからないのに、ましてや来年のことは予知できない。将来のことなど予測できるわけがないのだから、あれこれ言ってみてもはじまらないというたとえ」である。たとえの意味は理解したとしても、「なぜ鬼が笑う」という表現なのか考えさせられる。諸説あるそうだが、子ども受けするものに、「鬼は元来怖いもので厳しい顔をしている。その鬼でさえ笑ってしまうほど馬鹿げている」という解釈がある。英語のことわざでは、ずばりそのまま「何が起こるか誰にもわからない、神のみぞ知る」である。類句として、「卵がかえらないうちにヒヨコの数を数えるな(訳)」がある。

このことわざから派生したのかわからないが、「明日は明日の風が吹く」という言葉がある。「先のことはわからないのだから、取り越し苦労をしても仕方が無い」ということであろう。英語では、明日の食べ物を心配する人に向かって言う言葉として、“Let the morn come and the meat with it.”(朝を来らしめよ、そして朝と共に食べ物も)と言う。牧畜文化の英語の meat は「肉」が本来の意味であるが、「食べ物」として捉えることがことわざにはある。“One man's meat is another man's poison.”もそうである。「明

日は明日の風が吹く」で思い出すのは、ことわざではないが『風と共に去りぬ』*Gone with the Wind* の最後の場面のスカーレットの台詞、“Tomorrow is another day.”であろう。「明日は別の日」であるが、これが「明日は明日の風が吹く」と訳されていた。最近の訳では、「明日はまた明日の陽が昇るのだ」となっているそうである。

■参考文献

岩波書店辞書編集部(編). (2002) 『ことわざの知恵』(岩波新書)岩波書店

奥津文夫(著) (2008) 『ことわざで英語を学ぶ』三修社

創元社編集部(編) (2007) 『日英比較ことわざ事典』創元社

ピーター・ミルワード(著)山本浩(訳) (1977) 『日英ことわざ考』荒竹出版

(なかい・ひろかず 教授/教員養成センター長)
